
6つ子のパドリック

天海慎也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

6つ子のパドリック

【NZコード】

N5732F

【作者名】

天海慎也

【あらすじ】

この国には6つの種類の人種が存在する。マンカイド、フロラ、ロギア、リード、クリチャーそして、キープビリティ。身分制度の強いユースタリア国に生まれた6つ子の兄弟。不運なことに彼ら6人は生まれつき種族が違っていたため、國の方針で引き裂かれた。10年の月日がたち15歳になつた彼らは自由を求めて、6人全員で暮らせる国、パドリックへの逃亡を決意する。

『第1話

この国には6つの種類の人種が存在する。

この国の約30%を占め、知能IQが高い、マンカイド。

この国の約20%を占め、自然を愛し植物の力を巧みにあやつる、

フロラ

この国の約20%を占め、自然を愛し自然の力を巧みにあやつる、
ロギア

この国の約14%を占め、生きていらないものに命を与える、その物を
操る、リード

この国の約13%を占め、生きているものと契約を交わし、その動
物を操る、クリチャー

この国の約3%を占め、知能IQの低い変わりにマインドコントロ
ールやテレパシーを得意とする、キープビリティ
・・・・・

きりは 霧橋 ふんふ 霧風はそう書かれた本を嫌な顔をしながら閉じた。

そして、本を机に置くと机の隣のベットに腰掛けた。

「なあ？ 浩介。俺らってそんなに知能低いのかな？」と霧風はルームメイトの浩介に聞く。

「なんだよ…突然！」と浩介は読んでいたマンガを閉じて霧風の顔
を見た。

「いや…。だつてよ…。」と霧風は言葉を詰まらす。

「さあ？俺マンカイドに会つたことないし…分かんないよ」と浩介
「だよな…」

「でも一つだけ言えるのは授業で習つた通り、俺らは知力に行くための力を透視やテレパシーに使つてているということだろうな」と浩
介。

「そつか…」と霧風は咳くとベットに横になり天井を見つめた。

雰風はキープビリティである。もちろん浩介も・・・。

ここは、国政強制少年超能力者更生教育施設である。

キープビリティとして生まれた者は皆、ここで教育を受けるのだ。

キープビリティの大半は金髪をしているが、雰風だけは黒髪に黒い瞳を持っていた。

黒髪に黒い瞳はマンカイドに多く、雰風は友達に羨ましがられていた。

雰風は目を開じた。

すると、意識がどこかに吸い込まれていく気がした・。

あつ…予知夢…

そう思つた瞬間もう意識はその中に吸い込まれていった。

頭が揺さぶられる感覚、激しい頭痛、もうなにがなんだかわからな
い…。

頭が真っ白になつた…そして、次の瞬間。

雰風の目の前にこの施設の談話室が見えた。

時刻は12時半ごろ、暗い談話室のイスに一人の男が見える。

その男は自分と同じ顔、そして緑色の髪…。

そして、男は、「待つていた」と雰風に向かつて言つ。

「兄さん!!」という自分の声が聞こえた。

その声と共に目の前が真っ白になり、また頭が揺さぶられ気がつくと、ベットの上だった。

目覚めると同時にひどい吐き気がし、雰風はトイレに駆け込み全てを吐いた。

トイレから出でると浩介が言つた。

「予知夢か?」

「ああ…。」

「大丈夫か?」

「いつものことだ」と雰風。

「そうだが…つらいよな?」と浩介。

「キープビリティに生まれた以上避けられねえよ」と雰風は苦笑い

を返す。

「まあな」と浩介。

キープビリティは予知夢を見るとひどい頭痛や吐き気に襲われるのだ。

「予知夢を見るとキープビリティに生まれたことを後悔するよな」と霧風

「俺は、予知夢見なくても後悔してるぜ」と浩介。

「そりゃそうか」霧風は苦笑いをした。

キープビリティとして生まれた子はその強い能力のためコントロールがうまくいかず自傷行動を起こす子や精神崩壊、強すぎるテレパシーのためにしゃべることが困難な子、予知能力や人の心を読む能力のために現実が分らない子、また現実に意識を戻すことのできない子も存在するのだ。

浩介はその中の一人だつたらしく人の心を読む強い能力のために話すのが困難であり、親からひどい虐待を受けたひとりであった。

「」の前、佳織が深い予知夢で痙攣を起こして病院送りになつたからおまえも気をつけろよ」と浩介は言ってマンガを読みだす。

「ああ。気をつけるよ」と霧風は言つて、またベットに横になり、今の予知夢を思い出す。

俺と同じ顔。

緑の髪…。

兄さん…。

まさか…まさか…いや、そんなはずはない…。

そんなことを思いながら霧風の頭のなかには懐かしい兄の顔が映つていた。

元々、霧風は6つ子の末っ子として生まれた。

しかし、6人全員ちがう人種として生まれてきてしまったのである。その6人の中で一人だけ緑の髪を持つ兄がいた。

さっき出てきた男はその兄にそっくりだったのだ。

その兄の名は壱いち。

六人兄弟の長男として生まれ、兄弟唯一のマンカイドである。彼とは5歳の時以来会つてはいない。

「霧風！」と突然、浩介に大声で呼ばれ霧風は飛び上った。

「な、なんだよ……」

「さつきから呼んでいるだる」「？」

「えつ？ なに？」

「何？ ジャなくって…僕の話聞いてた？」

「あつ…『ごめん…全然』と霧風。

浩介は溜息を一つ吐くと、だから…と話を始めた。

「今日の討伐で何人殺した？」

「うん？ 12人かな？ …なんで？」

討伐とは、犯罪や凶悪な犯罪組織やそれに関わっている人を政府の勅令の下で殺すことである。

この国では、キープビリティ（超能力者）はその時だけ能力を使うことができる。その理由は、犯罪者が能力者であつたりするからである。

「今、おさむ治とテレパシーで話しててさ」と浩介

治とは、この施設で一番、テレパシーの力が強い子である。治の部屋はこの部屋から3つほど隣にあるが、浩介はその部屋からテレパシーで治と繋がっているみたいだ。

「ランキングによるとおまえ1位らしいよ？」と浩介。

「なにが？」と霧風。

「だから…討伐の成績！…」

「あ～…そう…」と霧風。

「やっぱり3Sクラスは一味、俺らと違うよな？ だって治が…」と浩介。

「そんなことない…」と霧風は言い放つと目を瞑つた。

暗闇に意識が吸い込まれていった。

それから、何時間たつたのだろう…。突然夜中に目を覚ました。

浩介が向い側のベットで寝ている。

雰風はそつと枕の下に隠しといた袋を掴み、ベットから抜け出した。部屋の唯一のドアのカギをサイコキネシスで音をたてないようにして軽く鍵穴を回すと、ドアのカギが“カチッ”と音をたてて開いた。ドアノブをひねりながら、ドアの外についているドアノブの警報線を弱いサイコキネシスで切り落とす。

そして、部屋のドアを引いて廊下に出た。

脱出成功である。

初めて夜、部屋から抜け出したのは、6歳のころだったかなあ？と思いつながら雰風は暗い廊下に足を出す。たしか警備員は一人だつたよな？と思いながら、雰風は透視を使って警備員を探す。

おっ！ゲット！階の階段と三階の廊下か…

雰風は一人の警備員と意識をつなぎ、歩き始めた。どうしても生き別れになつた兄さんに会いたかったのだ。

確かに…兄さんがいるのは談話室…談話室は二階だつたなあ…と雰風は思いながら、階段を上り談話室へとやつて来た。真つ暗な談話室に黒い人影があつた。

その人影がこちらを向く…。

「に…い…」そこまで言つて雰風は言葉を詰まらす。

その人影は兄さんではなく、クラスメイトの準じゅんであった。

彼は強いサイコキネシスの力を持つており、この前友達とケンカをした時にその力で友を殺し、独罰房に放りこまれた男である。

「よう！雰風。」

「準…解放されたのか？」

「そんなことあるはずねえだろう！」と準は髪を逆立て雰風に怒鳴り、サイコキネシスを雰風に飛ばす。

雰風の体は宙を舞い壁にすごい音でぶつかる。

「逃げてきたんだよ」と準は笑いながら雰風を見つめる。「あんなひでえ場所に何日もいれるか？」と言いつながら、準は雰風の頭をまるでボールのように蹴り上げた。

雰風は後ろの壁に強く頭を打つて氣を失つた。

フン…フ…！

おい！雰風！！

と体を揺すぶられ、雰風は目を開けた。

目の前は頭を打った影響なのか白く霞んでいる…。

ふわふわしたものが頭にくつついしている感触がする。

視界は定まらなかつたが、誰かが雰風の顔をのぞきこんでいる。

「おい！雰風、大丈夫か？」

自分によく似た懐かしい声が耳に響き、定まらない視界のなかに風に吹かれる緑色の髪が見えた。

「い…ち…兄さん？」

「そうだよ。雰風」と懐かしい声がした。

「そつか…よかつた…」と雰風はつぶやきまた意識を失つた。

「雰風！」と壹は雰風に向かつて叫んでいた。

(2)

それから、1-2時間後霧風は日の光で目を覚ました。

「こじこじー」 とつぶやいて霧風は起き上った。

「いてつー」 頭をあげると頭のてっぺんにひどい激痛が走る。

「まだ寝てなきゃだめだよ？ 頭さつき縫つたばつかりなんだから」と声が聞こえた。

確かに、頭のてっぺんには大きなガーゼが貼つてある。

「霧風！ ひさしひぶりじゅん」と突然男が霧風の前に顔を出す。

「うわあ！」 と霧風は大きな声をあげた。

「記念すべき第一声が“うわあ！”かよ… 兄ちゃん泣いちゃう」と男は赤い髪を振り回して泣くじぐさをする。

「も… もしかして… 陸兄さん？」 と霧風は呟いた。

「そりそりー 陸、陸！！」 と陸は嬉しそうに霧風に笑いかける。陸は6つ子の一男で、植物を操るフロラの力を持つている。

「ねえ？ 陸兄さんこじこじー？」

「兄さんなんて言つなよ… なんか照れるじゅん」と陸は言つて苦笑いをして「こじこじは車の中で今、STGから逃げているといふの」といった。

「STGだつて…！」 霧風は声をあげた。

STGとは青少年超能力者改革実行委員会のことであり、この国の超能力者の全ての管理を政府から任されている機関のことである。STGに追いかけられているということは犯罪者と同じく命の保証はなくなる。それに、今までSTGから逃げられた者はいない…なぜなら、彼らは超能力者の中でもすば抜けて能力の高い者たちを集め特殊集団SSCを使って犯罪者を捕まえるのである、SSCは超能力で人を殺すことを唯一許されている集団であり、霧風もこの集団に所属していた。

「なんで？ＳＴＧに追いかけられているの？」

「霧風を国政強制少年超能力者更生教育収容所から連れ出したからかな？」と陸。

「収容所？違うあそ」は学校だ！」と霧風。

「そうか……」と陸。

「僕を学校に返して……」と霧風。

「それは出来ない」と助手席の金髪の男が霧風を見て言つた。

「あつ……あ……アラシ兄さん？」と霧風は驚いてつぶやく。

そう霧風のほうを向いたのは、6つ子の三番目、ロギアとして生まれた嵐士^{あらし}だった。

「ああ、久し振りだなあ？」と嵐士はニヤリと笑うと話を続けた。

「ＳＴＧはもうお前を犯罪者とする表明をだしたぜ？今頃、収容所に戻つても殺されるだけだ。」

「そんな……でつ……でも、ちゃんとした理由を話せば……」と霧風が苦し紛れにそう言つと運転席から声がした。

「残念だけど、過去一回もキープビリティの話が通つた裁判は存在しないんだ。全て、一方的な裁判だからこの国が始まつてから一度も無罪判決は出されたことないし、死刑以外の刑が下されたこともないんだ」

「そんなの……嘘だ！……」と霧風は叫んだ。

「いや、本当だ。マンカイドが言つんだから間違えないよ」と陸。

「マンカイド？」と霧風。

「そうだ」と陸は言つて運転席を見た。

「もしかして……壱にい……？」と霧風。

「そうだ」と壱。

運転席のバックミラーに壱の顔が映つていた。

「なんで？」と霧風はつぶやいた。

もう、わけが分らなかつた。なんで？10年前に離れ離れになつた壱にい、陸、嵐士兄さんがここについて、なぜ自分は学校ではなくこゝでＳＴＧに追いかけられているのか？さっぱり分らず、霧風はこ

れが夢であつて欲しいと思つた。

しかし、霧風にはこれが夢ではないことが分かつていた。なぜなら、キープビリティの見る夢は全て予知夢か過去夢であり、その夢はどちらも見ている時はまるで写真をめくつていて「いつ」「いつ」の場面がアバウトに照らし出され、映像が長い間映し出されることはまず予知夢は少ない。過去夢は映像の場合が多いが、その映像は過去にあつた出来事のためにその画面全体がぼやけておりその画像に色鉛筆で色を塗つたというぬりえのようなアバウトな画像として映し出されるのだ。しかし、今、目の前にある画像は実にリアルに映し出されており、夢でないことが一目瞭然だつた。

「6人合せて60万ベーキド…また、懸賞金が上がりましたね」と車の後部座席から声がする。

霧風はまさか……と思つて後ろを見た。

そこには銀髪の青年がノート型パソコンをいじつていた。その隣には体格の良い青い髪の青年が静かに座つていた。

「えつ？…鏡平？と燐ちゃん？」

「そのクエストhonはなんですか？まさか自分の兄の顔を忘れたわけじゃないですね？」と銀髪の青年、鏡平は霧風の顔を見て魔王のように笑つた。

「そうじゃなくて…」と霧風は10年ぶりなのに変わらない鏡平の皮肉な言葉に怯えながらそう言つて、隣にいる燐を見た。燐は無表情のまま霧風の頭を撫でると10年前より低くなつた声で「おかれり」とただそれだけを呟いた。

「た…ただいま」と霧風は燐にそう返す。

「霧風…？」と燐が優しく声をかける。

「えつ？」

「涙…」

「くつ？」と霧風は燐にそう言われて初めて自分が泣いていることに気づく。

「どうした？霧風！…」と陸が慌てた声を出す。

「やつぱ頭痛いのか？」と嵐士。

「言い過ぎましたか？」と鏡平も少し慌てている。

霧風は首を振る。

燐の「おかえり」という言葉で全ての感情が溢れ出てきた。

「もう…会えないと思っていた…」と霧風はポソリと言つた。

10年前のあの雨の日、幼い壱兄が血だらけで弟達の名前を呼んでいた。

強制的に施設へと連れて行かれようとする弟達に手を伸ばし、必死に…

弟達を乗せた車をもう走ることも辛いであろう血の滲みでた足で追いかけてくる兄の顔を霧風はこの10年忘れたことがなかった。

「そうか…」と陸は霧風の背中を撫でる。

「俺だつて壱が国義務第一特別口ギア教育西中学校の寮に忍び込んで来なければ、身分の違つ俺らがまた会うことができるなんて思つてなかつたぜ？ましてや霧風に生きていく内に再会できるとは…」と嵐士。

燐が霧風の頭をポンポンと二回近く優しく叩いて「泣くな…」と言つた。

「うん…」と霧風は涙を拭つ。

「ところで壱兄貴。逃げ切れるのか？」と嵐士。

「う~ん…どうだろ？」と壱。

「どうだらじやねえだろーー！」と嵐士。

「だつて…」と言つ壱に嵐士は溜息を洩らす。

「あれ？ここつて高速道路だよね？」と突然壱は今気づいたーーとでもいうよひと言つた。

「えつ~せうだと思つたび…」と嵐士は窓の外を見る。

「じゃあ、鏡平の出番だねえ？」と壱は車を運転しながら笑つ。

「…必要最低限で良いですか？」と鏡平はパソコンをしまいながら言ひ。

「ここんじゃない？たぶん十分だよ」と壱。

「ＳＴＧに超能力者がいたら一瞬で壊されますよ？」

「うーん…たぶんいないよ、まだ朝の六時だし…」 と圭。

「でも、透視とか…」

「それはないと思つよ?」 と圭風が鏡平の話を裂く。

「透視してれば、僕わかるし…それに」と圭風は嵐士を見る。

「嵐士が後ろに台風を置いてきたから透視の妨害にもなつていて」

と圭が笑つて言つ。

「うん…」 と圭風。

「あら? 壱兄貴も圭風もなんで台風置いてきたって分かるの?」 と嵐士。

「透視しようとした嵐士に、この台風で方向分らなくなつた」と圭風。

「ラジオで台風情報やつているんだ」と圭。

「あらあら? 僕迷惑かけている?」 と嵐士はいたずらをしたように笑つた。

「ですね?」 と鏡平は皮肉のよつに言い、

「でも、なんとか逃げられそうですね?」 と圭に言つた。

その瞬間、六人を乗せた車の後ろの道路が盛り上がつた。

そして、その道路はどんどん成長しやがて空に届き、そんな大きな壁が道路を塞いだ。

後ろから追いかけていたＳＴＧの車は急ブレーキをかけて止まりその後ろから来た一般車も立ち往生した。ＳＴＧの車から出てきた男がそれを見上げて呟いた。

「…これは…リードの力…しかし、こんな短時間で壁が作れる奴がいたとは…」 彼は背筋が凍つた感覚を覚えながら、ＳＴＧの本部に連絡した。

「脱獄者、捕獲失敗。突然道路に立ちふさがる壁出現、すぐ写真送る」

ＳＴＧの本部に道路を立ちふさぐ壁の写真が送られると委員達は騒ぎ始めた。

「こんな壁を作れるのはリーダーしかいない…」

「短時間でこんな大きな壁を作れる能力者はそう多くはないだろ？RUGに連絡しろ！！！」

「超能力者達はどうした？何！！台風で力がつかえない？誰だ！台風をつくったのは！！！」

STGは脱獄者が逃げられるという異常な事態に混乱していた。

その頃、壁を作った張本人は何もなかつたようにパソコンをこじり、台風を作った嵐士は「腹減った」と呟んでいた。

高速を降りながら壱が言つ。

「そういえばさ～あ？鏡平。壁作るのってリードひとつで基本中の基本だけ？タイミングずれたら足止めにならなかつたんじゃない？落とし穴の方が有効的だつたんじやないかな？」と壱。

「…」の俺がタイミングを間違えることはない。」と鏡平。

「やうだね」と壱は鏡平のあまりの自信のありよう嬉しさのあまり苦笑いをした。

「あ～あ…。なんか嵐士と鏡平だけ活躍してない？俺もSTGの奴らがやらせたかったあ」と陸。

「どうせ、また追つてきますよ。STGは国の機関で超能力者を管理するところの名譽があるからね。それに超能力者を逃がしたということが公になれば国民から圧力がかかる」と壱。

「俺らに賞金賭けているんだぜ？もひ、公にしてくるじやん」と嵐士。

「…たぶん種族不明として賞金賭けているんじゃないかな？いちおうキープビリティの身分は一番守られているから、私がキープビリティだと確認出来れば、賞金は一度消えると思うよ？でも、また復活するだろうね。ちなみにSTG以外は逃げたことをそこまで重要視はしないと思うよ？私達の賞金は全てSTGが隠しカメラの映像を写真にして国政に送りつけ賞金を懸けるように依頼したんだろうね？」と壱。

「じゃあ、にいさんは逃げる必要ない？」と陸。

「陸…私が前にいった話聞いていた？」と壱。

「えつ？…なんだっけ？」と陸。

「まあ、いいや、どうせ霧風と燐と鏡平にまた話さなきゃと思つて

いたし……」と壱。

「ああ！パドリックの話？」と嵐士。

「そう……」と壱。

「パドリック？」と不思議そうに聞き返す霧風に鏡平がパソコンを見ながら言う。

「パドリック共和国。人口5000万人。首都パドリク、世界大戦の時に伝説となつた無敵のパドリック兵の出身国。六人の王様があり、六種族が平等に暮らす国。」

「そう。パドリックはこの世界で唯一、種族による身分制度がない国なんだ。だからこの国に上手く亡命出来れば、私達は身分の心配をすることなく一緒にいれるんだ。」と壱。

「でも、パドリックはこの国から遙か西にあるのですよ？今、僕らがいるユースタリア国がパーラーリア地区でパドリック共和国はウェーストラーリア地区その間にはセントラーリア地区、イーストラーリア地区、カンターラーリア地区、砂漠地区、高地地区、オアスラーリア地区、の少なくとも6つの地区を超えていかないとなりませんよ？それに一つの地区に少なくとも4つの国が入りますよ？」と鏡平。

「そんなことは承知の上だよ？私はもう十年前のようなことを繰り返したくないんだ」と壱。

「…」

鏡平はなにも言えず下を向いた。

沈黙が続いた……。鏡平も陸も嵐士も燐も霧風も10年前の壱の姿が10年間脳裏に焼き付いて離れなかつた。

「私はこの10年、ただ兄弟を国から取り戻すことしか考えていないかつた。覚えている？私が10年前君たちに言つた言葉……」と壱。

霧風は10年前の光景を思い浮かべる。

あれは大雨の日、5才の壱が国政の役人に押さえつけられながら叫んでいた。

「陸！！嵐士！鏡平！！燐！！霧風！」と役人に無理やり連れてい

かれる5人に向かつて手を伸ばす。

「兄貴！兄貴！」と必死に手を伸ばす陸。

「イヤだ」放せ」と暴れる嵐士。

震え涙を流しながら壱に向かつて必死に手を伸ばす鏡平。

「壱さん！？」と必死に叫ぶ燐。

殴られ蹴られ血を流し、ぐつたりしながら役人の腕の中で壱に血だらけの手で手を伸ばす自分の姿。

それぞれの車に乗せられ去つて行く兄弟に必死に叫んでいる兄の姿を霧風は朦朧とする意識の中で見ていた。

車が発車する時、壱さんは役人の腕をすり抜け何かを叫びながら5台の車を追つていた。

あの時壱さんは何を叫んだのか？霧風の耳にはその言葉は届いていなかった。

「…絶対、迎えに行くから……だろ？」と陸が静かに言つ。

「さすが！陸だねえ？」と壱は笑つて言つ。

「10年間、その言葉が俺の中には響いていた」と陸は恥ずかしそうに言つ。

「だから、迎えに来たのか！！」と嵐士。

「そういうこと…！」と壱は笑つ。

「確かに兄貴は昔から絶対、約束破らなかつたな？」と陸。

「そうそう、陸と嵐士には何度も約束をやぶられたか」と壱。

「うつせ」と嵐士。

「アハハ…まあ、いいじゃん」と陸は笑つた。

「そういえば、パドリックに亡命するのは分かつたけど…その国つてそう簡単に亡命できるの？」と霧風。

「おお…よくそこに気づいたな？霧風」と嵐士が褒める。

「私達、6人が一齊に亡命すれば大丈夫。」と壱。

「どういうことですか？」と鏡平。

「アレだろ？…6種族が集まつた状態で亡命すればいいんだろ？」
と陸。

「おい！…なんでそういう微妙なところだけ覚えていいんだ？陸兄貴！」と嵐士

「アハハ…」と陸は笑った。

「まあ、陸の言う通りなんだけど…細かく言つと6種族が一人ずつ入つた6人を1つのグループとして亡命する必要があるんだ。だから、たとえば6人の中にマンカイドがいなくロギアが2人いた場合、亡命は認められない。この場合はロギアを2つのグループに分けて1つのグループにはロギアの変わりにマンカイドを入れて、もう一つのグループにはロギア以外の5種族を入れなければならないんだ」と壺。

「1つの種族から1人ずつでこの世界には6種族あるから6人ってこと？」と霧風。

「そう、さつきも言つたけど…パドリックは6種族が皆、平等に暮らす国だからそれになじめない人は国を荒らすだけだろ？亡命者はどこの国から来たかパドリック側には分らないから亡命者を国に入れるのには慎重なんだろうね？」と壺。

「亡命者を篩いにかけているってことですね？」と鏡平。

「まあ、そういうこと！だから私達は誰一人いなくなるワケにはいかないんだ！」と壺。

「なんで？」と陸。

「だから…！陸兄貴！ちゃんと話聞いていたか？」と嵐士。

「ううん…半分くらい？」と言いながら陸は無邪気な笑顔を嵐士にかえす。

「だから…！俺ら6人は皆、種族が違うだろ？」

「うん…」

「パドリックに亡命するには6人全員で亡命しなきやならないって言うルールがあるワケ！…！」

「へ～え」と陸は感心したように頷く。

「分かった？」と嵐士。

「うんうん、分かった、分かった」と陸は楽しそう笑つて頷いた。

「つてか、壱兄貴これからビビりするんだ?」

「う~ん……」と壱は少し悩んで言った。

「今日はもう宿へ行こうか?この道路の先にマルシャという港町があるはずだから……すいべの小さな町だから私達が追われ者でも気づかないとおもうよ……」

「それはマルシャの町の町か?」と陸が壱に聞く。

「その通り!……さすが陸だね」と陆。

(3) (後書き)

ある理由でしづら〜」の作品を休載させていただきます。
解決し次第、連載を開始いたします。「迷惑をおかけしてすみませ
ん」と――

今後ともよろしくお願いします。

by・天海 聖哉&成田 慎也

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5732f/>

6つ子のパドリック

2010年10月10日05時37分発行